ハヤカワ文庫 〈SF893〉

アンタレス突破

マイクル・マッコーラム
小隅 黎訳

早川書房

訳者略歴　大正15年生，昭和25年東京工業大学機械科卒，ＳＦ研究家・作家・翻訳家　主訳書「プロテウス・オペレーション」ホーガン「インテグラル・ツリー」ニーヴン「アンタレスの夜明け」マッコーラム（以上早川書房刊）他

HM=

NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

アンタレス突破

〈SF893〉

一九九〇年十月二十日　印刷
一九九〇年十月三十一日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　M・マッコーラム
訳者　小隅黎
発行者　早川浩
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京（二五二）三一一一（大代表）
振替口座番号　東京六-四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社　製本・株式会社川島製本所
Printed and bound in Japan
ISBN4-15-010893-5 C0197

ハヤカワ文庫SF

〈SF693〉

アルタード・ケース

マイクル・マッコーラム

小隅 黎訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

早川書房

2881

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1990 Hayakawa Publishing, Inc.

ANTARES PASSAGE

by

Michael McCollum

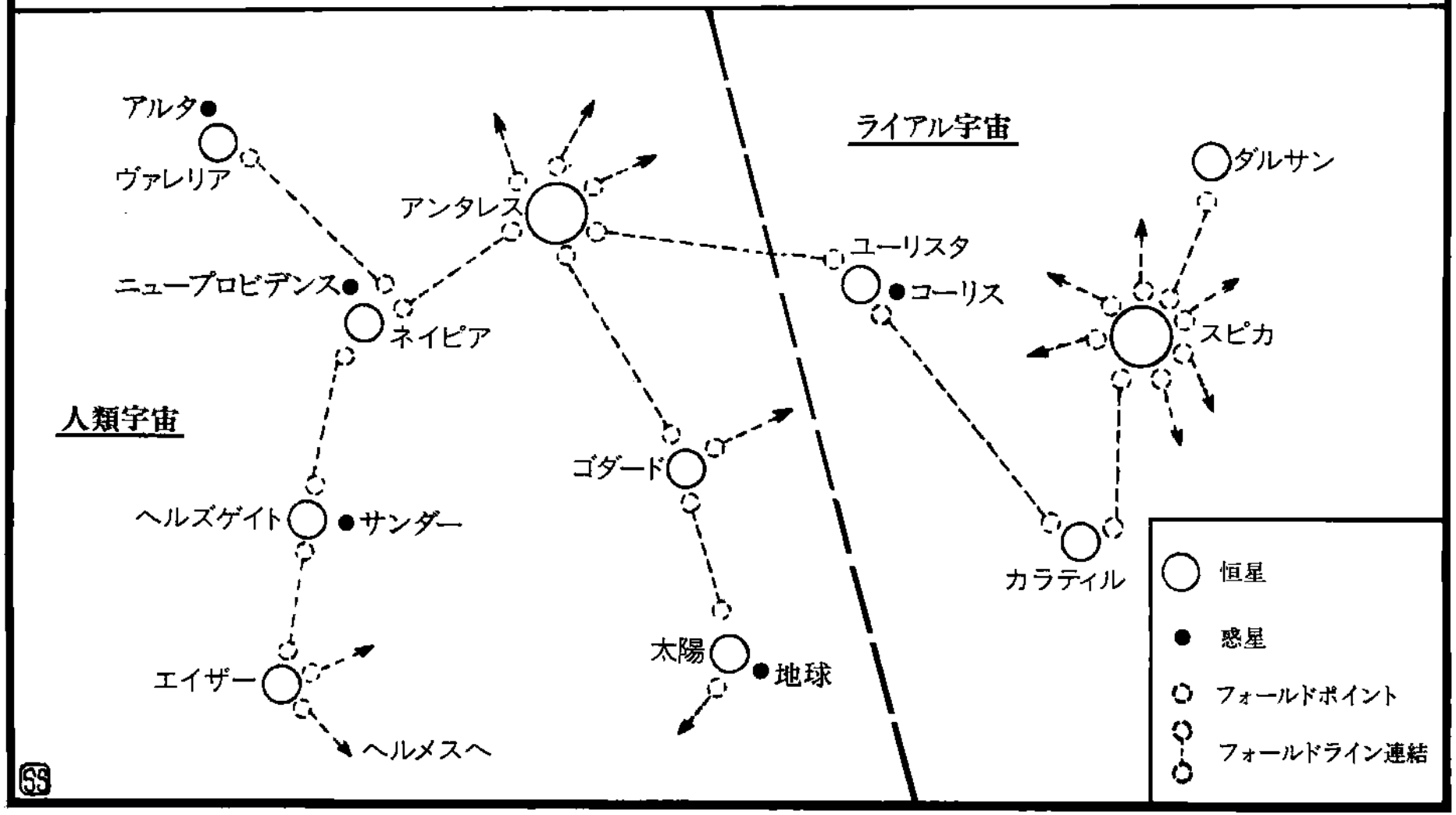
Copyright © 1987 by
Michael McCollum

Translated by
Rei Kozumi

First published 1990 in Japan by
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.
This book is published in Japan by
direct arrangement with
SCOTT MEREDITH LITERARY AGENCY, INC.

フォールドスペース位相図

アンタレス、およびスピカ・フォールドスペース星団(2639年1月)



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

登場人物

●アルタ

リチャード・ドレイク上級大佐　ディスカバリー号艦長
ロークォル・マーチャント中佐　同副長
アルゴス・クリストバル大尉　同航法士
モリエット・ヘイドン　同通信士
ギャビン・アーナム　同機関長
ベラ・マーストン大佐　ダガー号艦長
スタニスラウ・バレット　アルタ国会議員
クラレンス・ウィットロウ　現地球大使
ベサニイ・リンドクイスト　クラレンスの姪、地球大使代理

●サンダー

フィリップ・ウォーカーク少尉　皇太子

セルゲイ・ファロン・ガウアー提督　海軍長官
ヴィクター・フサニック伯爵　王室顧問会議首席委員
ボリス・アルヴァレズ教授　王立学士院特別会員
ヴァルディス中佐　王室宇宙海兵隊第六師団第三三連隊第二大隊長

●ゴダード、および地球
グレゴリー・オールドフィールド　ゴダード地球大使館一等書記官
R・T・ライアスン海軍中将　〈大艦隊（グランドフリート）〉一七一二部隊指揮官
ジョシュア・ブレナム　次席調整官
リサ・ブレナム　ジョシュアの娘

アンタレス突破

星の誕生と死

その星は、銀河世界の中では、どちらかといえば新来者だった。それは、恒星間に漂う広大な水素の雲がたがいに重力で引き合い、数百万年にわたってみずからの上へ落ちこんでいくことによって生をうけた。雲が凝集するにつれて、その中心部の温度はしだいに上昇した。やがてそれは内部から可視光を発して輝きはじめ、ついで、ある日、その中心部の温度が、水素が融合反応を起こしてヘリウムになるレベルに達した。かくてその日、宇宙の漆黒の闇を照らす新たな恒星が誕生した。

この星の輝きは、これより小さな同胞数千個分にも匹敵するほど明るかった。事実、その輻射によって、この星は銀河の遠い端からでも見えるほどの目印となった。しかし、そういった無駄づかいは、それなりのつけを払わないわけにはいかない。小ぶりな恒星が当てがわれた融合可能な水素を使い尽くすには何百億年もかかるのに、この巨星は、十億年に満たない期間で同じことをやり遂げてしまった。猿に似た最初の先史人類がアフリカのサバンナに進出をはじ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

めたころ、この星の水素燃料は底をつきかけており、それが燃え尽きると同時に中心部の核の炎は消滅した。

核融合の終焉とともに、最初の水素雲を形づくったような収縮が再開された。中心部が内側へ落ちこむにつれ、温度は急激に上昇した。数秒にして星の中心温度は、ヘリウムを炭素に変える融合反応の発生点に達した。今回は、前段階の燃え殻であるヘリウムを燃料とする核の炎が燃えあがった。今度の火は前のより高温だったから、エネルギーの消費はさらに速かった。この新たなエネルギーの奔流を周囲の空間へ放散させる広い表面積を得るため、星は膨張した。その膨張にともなって、星のいちばん外側の層は冷却され、色が変化した。これまで明るい青白色の光を放っていた星が、いまや明るい黄緑色の表面を持つようになった。

この急激なヘリウム－炭素サイクルによる燃焼は、地球に最初の定住型農耕社会が現れるころまでつづいた。だがやがて、ヘリウムの供給が絶えて内部の炎が衰えると、さらにつぎの収縮と燃焼のサイクルがはじまった。新たなエネルギー源は、今度は炭素原子であった。ふたたびその新たな燃料は前段階以上に大量のエネルギーを生み出し、その熱を放散させるだけの表面積をつくり出すために星はさらに膨張した。直径が太陽の四百倍に達して安定するころには、その色合いも黄緑色から濃い赤橙色へと変わっていた。

人類最初の望遠鏡がその向きを転じたとき、星はすでにかなりの老齢に達していた。数世紀後、はじめてそこに到着した恒星船団は、核反応の荒れ狂う星の中心部が予期したより多くのニュートリノを放出していることから、その事実を記録にとどめた。余命いくばくもないこと

は、当時すでに明らかだった。それでも、星の一生はきわめて長いものだから、これほど早く終わりが来ようとは、誰ひとり予想だにしていなかったのである。

二五一二年八月三日の一七三二時、星は最後の炭素燃料を使いきった。すぐにまた、以前の収縮と加熱のサイクルがはじまった。が、今回はいささか事情がちがっていた。すでにこの星の中心核には鉄が多量に含まれており、この鉄は融合してもエネルギーを生み出すことができない。鉄の原子核の融合は、むしろ周囲からエネルギーを奪う方向に働く。この鉄の融合反応によって中心核を決定的に冷却された星は、長年にわたる重力との闘いを断念した。核の最終的な崩壊がはじまった。

何百兆トンの何兆倍もの物質が内部に陥裂し、数百万年ものあいだ蓄えてきたポテンシャル・エネルギーを放出した。この〝位置エネルギー〟が熱に変わったため、中心温度はたちまち無限大に向かって上昇した。この熱の一部は星の中層大気中に放散したが、その層は、星の核とは異なり、まだ燃えていない水素に満ちあふれていた。すさまじい熱核反応が起こった。たちまちそこでは一秒ごとに、それまでこの星が一生かかって放出したのと同じほどのエネルギーが生み出されることとなった。

すみやかに終焉が訪れ、かつて人類が目にしたこともないほどの規模で、この星は爆発した。

1

商業用シャトルがホームポート宇宙港に着陸したのは正午過ぎだった。その時刻でもなお、見あげる方向さえ誤らなければ、濃い紫色をしたアルタの空に、アンタレス星霧（ネビュラ）の姿ははっきりと見分けることができた。この空の彼方に新星として明るく燃えあがってからすでに三年を経たアンタレスは、もはや一時ほどの目を灼きつくすような光を放ってはいないが、超新星のエネルギーと、アルタとの距離が比較的近いことから、あと数年にわたってそれは昼の光の中でも肉眼で見えるはずだと言われていた。

リチャード・アーサー・ドレイク上級大佐は座席のストラップをはずして立ちあがると、頭上の手荷物棚から旅行鞄を取りおろした。周囲でも、四十人あまりの乗客が同じようにしている。やがてみんな思い思いにシャトルの中央通路の列に向かって並ぶと、上陸用ブリッジがシャトルの主翼の上を伸びてきて船腹のエアロックに接続されるまでの長い待ち時間がはじまった。

ドレイクは中背で、体格はやせて筋肉質のほうだ。伝統的な宇宙軍スタイルに短く刈りあげた髪は黒いが、生えぎわにはわずかに白いものが見えている。緑色の眼、眉根のかすかなしわ、そして、片方の眉を不均等に分ける白っぽい傷痕。通路をゆっくりと移動するときの彼の身のこなしは、大きく変動する加速度と重力のもとで動きまわることに習熟した人間のそれだ。

行列はなかなか進まなかった。乗客のひとりひとりが、船体中央のエアロックの手前にある荷物ロッカーまで来ると、そこで立ちどまって機内持ち込みの鞄を見つけようとして、動きを邪魔するからである。いつもなら、遅れがつづくにつれてだんだん忍耐が底をついてくるところだ。が、今日はちがっていた。恒星船内で呼吸用気体としてとおっている再生空気の悪臭を六カ月にわたって吸っていたあとだけに、彼はただそこに立ってエアロックのほうから流れてくる新鮮な空気を思いきり吸いこんでいるだけで、この上なく幸せな気分になれるのだった。

だがやがて、彼も人々といっしょにブリッジを渡り、宙港ビルの中へ入った。そのまま出迎えの人混みのあいだを縫うようにして進み、中央ターミナルビルに向かう走路に乗ろうとしたちょうどそのとき、なつかしい声が呼びかけた。

「リチャード！」

その声にふり向いたドレイクは、腕の中に飛びこんできたかぐわしい女らしさのかたまりに圧倒されそうになった。二本の腕が首に巻きつき、暖かいくちびるが狂おしく彼の口に押しつけられた。ドレイクはたっぷりとそれに応え、ついでその襲撃者から離れながらにやりと笑った。

「失礼ですが、以前どこかでお目にかかりましたっけ？」
「あら、わたしのことは知っておくほうが身のためよ」ベサニイ・リンドクイストは、わざとらしい大まじめな口調で答えた。「結婚のお約束（デート）をしたこと、覚えていらっしゃらないの？」
「でしたっけ？」と彼は反問した。「たしかこの前のとき、日取り（デート）は決めたくないと言っておられたと――」
「はぐらかさないで！　からかうのをやめないと、申しこみを受けたことも忘れてしまいますからね」
「わかりました、奥様（マム）。ただしわたしの記憶では、申しこんだのはたしかあなたのほうだったと思いますが」
「だとするとそれはあなたの記憶ちがいってことですわ。それはそうと、わたしに会えてうれしくないの？」
「うれしいにきまってるさ、ベス。ちょっと、少しさがって、きみの姿を眺めさせてくれないか」
ドレイクはフィアンセを腕の長さだけ押しやり、その顔をじっと見つめた。ベサニイはほとんど彼と同じくらい背丈があり、均整のとれた身体つきにゆったりした優雅な雰囲気をまとわりつかせている。ハート型の顔を肩までの長さのとび色の髪がふちどり、わずかに目尻のあがった緑色の瞳が高い頬骨をひきたてている。笑みを浮かべると両の頬に深いえくぼがきざまれる。たっぷりとたがいに見つめ合ったあと、彼はもう一度彼女を引きよせながらため息をつい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com